

2023 年度第 2 回支部集会【北海道支部】

主催：公益社団法人日本語教育学会
共催：北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部

日時：2023 年 7 月 15 日(土)13:25～16:35 (受付開始 13:00) [本催しのポスターはこちら](#)
会場：北海道大学 学生交流ステーション 1 階, 2 階 (〒060-0815 札幌市北区北 15 条西 8 丁目)
交通アクセス：JR 札幌駅北口より徒歩 20 分, 地下鉄南北線「北 12 条駅」より徒歩 10 分
<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/campus/campusmap/>
参加費：500 円(マイページより事前参加登録時に支払い) 定員：50 名
対象：日本語教育に関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。
申込締切：2023 年 7 月 12 日(水)23:59
(定員に達した場合は、締切日以前に締め切ります。会場に余裕があれば当日参加も受け付けます)
申込方法：[日本語教育学会マイページ](#) から事前参加登録をお願いいたします。
問合せ先：公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会
E-mail: shibu@nkg.or.jp TEL: 03-3262-4291(平日 9～18 時のみ)

◆支部集会日程◆

13:00	受付開始	【1 階ロビー】
13:25-13:30	開会挨拶	【1 階ロビー】
13:30-15:00	ポスター発表(4 件)・交流ひろば(5 件)	【1 階ロビー, 106 室, 107 室】
15:00-15:15	休憩	
15:15-16:30	北見市「いろはの会」による活動内容の発表と交流会	【2 階 209 室】
16:30-16:35	閉会挨拶	【2 階 209 室】

開会挨拶 【13:25-13:30 / 1 階ロビー】

ポスター発表 【13:30-15:00 / 1 階ロビー】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。発表要旨は本プログラム p.4～, 詳細は予稿集原稿をご覧ください。

- ① 具体的な状況を踏まえたライティング教材作成
—推薦状依頼メールに求められる内容・表現の分析から—
副田恵理子(藤女子大学)・藤田百子(東京外国語大)・千石昂(タマサート大学)

- ② 「自然な非流暢性」を学ぶ・教えるための一考察
佐藤淳子(北海道大学大学院生)

- ③ セルフスタディーを日本語授業に取り入れることの意義
—独学可能な時代に語学教師は何ができるか—
池田朋子(マギル大学)

- ④ 日本語教育におけるプロジェクト型授業の整理の試み—文献調査から見えてきた特徴—
浅津嘉之(関西学院大学)・中岡樹里(京都精華大学)・山本真理(関西学院大学)

交流ひろば

【13:30-15:00／1階 106 室, 107 室】

※「交流ひろば」は、日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。「交流ひろば」への出展は、学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

- ① 親しくなるための日本語教材試案—アサーティブな関係構築を目指して 【106 室】
藤森弘子(帝京大学)・前田真紀(東京外国語大学)・
高村郁子(東京工科大学附属日本語学校)
私たちは「親しくなるための日本語」をめざした教材を開発しています。「自分のことを知ってもらい、相手のことを知る」という人間関係を構築するプロセスを基本とし、互いに対等な立場で共感し、教え合う、聞き合うといった活動を考えています。興味のある方はぜひお越しください。

- ② 日本語学習教材における合成音声の実用性 【106 室】
—「やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集」の実例を基に—
中川健司(横浜国立大学)
出展者の研究グループは、外国人介護従事者向けの教材開発を行っています。今回合成音声作成ソフトを用いて、ウェブサイト「やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集」に音声コンテンツを追加する試みを行いました。当日は、日本語学習教材における合成音声の実用性や活用の可能性について意見交換を行いたいと思っています。興味のある方はぜひお越しください。

- ③ 筑波大学 日本語・日本事情遠隔教育拠点の紹介 【107 室】
伊藤秀明(筑波大学)
筑波大学 日本語・日本事情遠隔教育拠点では、日本語教育のための学習コンテンツやツールを公開しています。コンテンツの使い方の紹介とともに、現場での活用法や今後の協力などについて一緒に考えていきたいと考えています。使い方を知りたいなども含めて興味のある方はぜひお越しください。

④ 地域の日本語学習支援者に対する研修を考える—愛媛県を事例として— 【107 室】

高橋志野(愛媛大学)・向井留実子(同)

私たちは地域の日本語学習支援者の育成について研究をしているグループです。この度、愛媛県で日本語ボランティア団体・公的機関に対して人材育成・研修の実施に関するアンケート調査を行いました。当日は、この結果を紹介するとともに、地域の日本語学習支援者育成のための研修のあり方について意見交換・情報共有をしたいと考えています。興味のある方はぜひお越しください。

**⑤ 理工系大学院生を対象とした初級教材の開発
—対面・オンデマンド併用コースでの使用を目指して—** 【107 室】

山路奈保子(九州工業大学)・石川朋子(同)

日本語を勉強したいけれども研究で忙しい大学院生のために、挫折せずに修了できる初級コースを模索中です。文法項目は絞りつつ口語的表現を豊富に取り入れたメイン教材と、予習及び欠席時の代替として視聴するオンライン教材を開発しています。同様の学習者を担当するかたがたと情報共有・意見交換ができればと思います。

休憩 【15:00-15:15】

講演・意見交換会 【15:15-16:30 / 2 階 209 室】

**「北見で 20 年以上も続いている「いろはの会」、
その秘訣を教えて!!」**

北見市で 20 年以上に渡り多くの学習者を集め、日本語学習支援を続けている「いろはの会」の方々に、活動内容を発表していただくとともに、学習者の属性別の支援のコツについて伺います。その活動と組織運営を事例として、地方における多様化する日本語学習ニーズへの対応のあり方、楽しみながら支援を継続する秘訣をいっしょに考えたいと思います。

【講演】 15:20-15:40

オホーツクのボランティア「いろはの会」の活動と運営 伊藤悠紀子(いろはの会 会長)

【交流・意見交換会】 15:45-16:30

「技能実習生支援」「留学生支援」「ボランティア組織の運営」などテーマごとに分かれて意見交換を行います。

閉会挨拶 【16:30-16:35 / 2 階 209 室】

[2023 年度第 2 回支部集会(北海道大学, 2023.7.15)ポスター発表①]

具体的な状況を踏まえたライティング教材作成

—推薦状依頼メールに求められる内容・表現の分析から—

副田恵理子・藤田百子・千石昂

本発表では、具体的な状況を踏まえて書けるようになるためのオンライン教材の開発プロセスについて説明する。近年、メールやソーシャルメディアの普及により、幅広い「書く」コミュニケーションが求められる。そのような中で、発表者らは「書く」ことが求められる個別の具体的な状況で適切に書けるようになるための教材の開発を目指した。そこで、① 具体的な書くコミュニケーション場面の収集、② 具体的な状況で求められるメール作成のスキルの抽出、③ 求められる表現の役割の検討とその説明方法の検討、という調査、検討を経て教材作成を行った。本教材は、「具体的な状況でどのような内容や表現を書くことが求められるのかを提示している」「表現の辞書的な意味だけでなく、そのコミュニケーション上の役割を明確にしている」「どのようなチャンクで表現を提示することが学習者にとって理解しやすいのかを吟味している」という点で新しい教材だと言える。

(副田—藤女子大学, 藤田—東京外国語大学, 千石—タマサート大学)

[2023 年度第 2 回支部集会(北海道大学, 2023.7.15)ポスター発表②]

「自然な非流暢性」を学ぶ・教えるための一考察

佐藤淳子

母語話者発話もフィラーやリベアなど非流暢性を多く含み、かつそれらはコミュニケーション上の機能を持つことが明らかになってきた。しかし日本語教育の現場では非流暢性を体系的に教えるという実践はほとんど行われていない。現場でどのような非流暢性を取り上げるかの検討に際し、本発表ではまずコミュニケーション上の機能を持つ非流暢性を「物理的な音や形態としては発話の流れを遮る要素であるものの、聞き手側にはエラーや乱れとは認識されない非流暢性」と捉えた。そして、ある言語運用場面で収集した発話データに対して、別の母語話者が感じた印象（自然かどうか、なぜそう感じたか）の言及をもとに、「自然な非流暢性」の要素を探索的に探った。その結果、今回の言語運用場面（教師の誤りを指摘する）では、語末の音の延伸や、語中の途切れ、「あの一」というフィラーの使用、無音のポーズの部分が自然だとみなされる要因になっていた。

(北海道大学大学院生)

[2023 年度第 2 回支部集会(北海道大学, 2023.7.15)ポスター発表③]

セルフスタディーを日本語授業に取り入れることの意義

—独学可能な時代に語学教師は何ができるか—

池田朋子

日本語をある程度のレベルまで独学し、初中級やそれ以上のレベルの日本語クラスに編入する独学経験者の増加に伴い、クラス内のレベル差の拡大が指摘されるようになった。本発表では、この問題への対応策として取り入れているセルフスタディープロジェクトについて報告する。レベルを揃えて一斉学習を可能にするのではなく、学習者の多様な学習背景を尊重し、個々の自律性を育てることを目的としたこの活動では、自ら立てた計画を自己モニタリングし、計画を改善していく自己調整学習のサイクルが観察され、多様な学習経験を持つクラスメイトから受ける刺激が学習を助けていることがわかった。また、実施後のアンケートの回答者12人全員が「日本語が上達したと感じる」と自己評価したことに注目し、自分で目標を設定し、学習を選択することが達成感に与える影響と、自律性を促す環境を作る教師側に求められる能力について考察する。

(マギル大学)

[2023年度第2回支部集会(北海道大学, 2023.7.15)ポスター発表④]

日本語教育におけるプロジェクト型授業の整理の試み

—文献調査から見えてきた特徴—

浅津嘉之・中岡樹里・山本真理

近年、日本語教育においてもプロジェクト型授業の実践が多く行われている。しかし、日本語のレベル差、プロジェクト作業での日本語使用、教員の関わり方など、言語教育におけるプロジェクト型授業は様々な要素が組み合わさって構成されており、それらを自分の実践の設計や評価に結び付けることには難しさがある。自分に合う実践例や必要な情報を見つけるには、プロジェクト型学習を構成する複雑な要素を整理できる道具が必要である。そこで、本発表は、日本語教育におけるプロジェクト型授業を整理するための指標を提示する。言語教育におけるプロジェクト型授業についての文献調査を行い、6つの指標を生成した(言語学習の位置づけ、プロジェクトの位置づけ、教師の関与、教室外との連携、学習者の特性、課題)。この指標を使うことにより、教師は多様な実践を整理し、自己の実践との比較と検証ができるようになる。

(浅津—関西学院大学, 中岡—京都精華大学, 山本—関西学院大学)

以上